

2018年3月16日(金)

平成29年度第6回小学校ゼミナール記録(八島班)

参加者: 影山和也(広島大学准教授), 八島恵美(広島大学附属小学校教諭;授業者), 石川雅章(広島大学院生)

1. 協議事項

小学校算数科 第2学年 単元「ひょうとグラフをつかって」における授業協議

2. 授業の意図と協議内容

本グループでは、2018年2月9/10日(土/日)に広島大学附属小学校において開催された第67回初等教育全国協議会に関して、八島教諭による実践、第2学年算数科/単元「ひょうとグラフをつかって」の事後検討が行われた。本授業は、新学習指導要領における第2学年「データの活用」領域のねらいに準じて、「何を知りたいのか」に応じた観点に着目し、データを表やグラフを用いて分類整理し、特徴や傾向を読みとり、考察することができる」ことを目標としていた。

目標の実現に向け、「ひよこカフェの新メニューを何にするのか」を問題場面とし、「売上のレシートをもとにメニューを味や種類といった多面的な視点から問題を捉え、表やグラフを用いて分類整理する」ことで、児童が「人気や売上の傾向を把握できる」ような授業展開がとられた。従って、協議においては主に「目標に対する問題の妥当性」、「データの示し方・データ数」、「授業のまとめ」に焦点が当てられた。

3. 議論要約

○目標に対する問題の妥当性について

授業者より、導入時の問いかけが児童を迷わせたことで、スムーズに前半部(問題の提示～データを処理する視点・方法の検討)が展開されなかったと述べられた。また、協議の中ではその原因として、新メニューを「購買者側」の視点で見ると、「店側」の視点でみるのが教師と児童の間でずれていたことも挙げられた。本時においては特に、データがレシートの情報であることから、「店側」の視点を教師と児童の間で共有できるような問いかけが必要であったとの意見が出された。

○データの示し方・データ数について

本時では、既存のメニューを「味」と「種類」の視点から捉え直し、売上高を整理することで新メニューを決定することが意図されていた。しかしながら、児童が「食感」に着目したことで、分析の視点が広がりすぎてしまい、教師が意図的にデータを整理する視点を軌道修正しなければいけなかったことから、低学年においては、視点を広げすぎないデータの示し方が重要であるとの意見が述べられた。また、児童に与えたデータ数は、傾向を読み取る際の母数の重要性を統計的に考慮してのものであったが、適切な母数の基準を小学校段階で示すことは難しく、適切なデータ数を再検討していく必要性が述べられた。

○授業のまとめについて

本時では、結論に2通りの解釈が現れるようにデータの分布を工夫していた。こうした工夫によって、児童が解釈の根拠を互いに説明する活動が促され、多くの児童が「新メニューの開発」に向けてデータを根拠として結論を主張できていた。これを受け、本時は統計的な考えの指導として有効であったのではないかと意見が出された。一方で、結論が示された後や本時の発展性については検討が必要である。

(文責: 石川 雅章, 西 宗一郎)